

ハインリヒ・マンの長編小説『首脳』について

山口 裕

(一)

ヴィルヘルム二世支配下のドイツで、市民階級出身の親友二人が、まもなく帝国宰相になる人物の知遇を得たのをきっかけに、理想主義者の青年テラは代議士となってクナック財閥（クルップ）の総支配人を兼ね、いま一人出世主義者のマンゴルフは帝国初の平民宰相にまで成り上がる。しかし、スタンダールの『赤と黒』を下敷きにして破格の出世を扱ったこの小説で、出世そのものは問題ではなく、二人は、夢破れて首相官邸でおたがいの頭にピストルを撃ちこんで、自殺してしまう。二人は、ヴィルヘルムドイツの政治をそれぞれ自分の理想の方向に動かそうとして、一敗地にまみれたのであった。

以上はハインリヒ・マンの『首脳』（Der Kopf 一九二五年）のごく簡単な梗概であるが、この小説は、「指導者たちの小説」という副題がついていて、『臣下——市民階級の小説』（一九一六年）、『貧しき人びと——プロレタリアの小説』（一九一七年）の後をうけ、『帝国——ヴィルヘルム二世時代のドイツ社会の小説』と銘打たれた『帝国』三部作の第三部として書かれた。ただし第一部と第二部のあいだにはストーリーの上でゆるやかなが

ら関連があったのだが、第三部は時間、場所、登場人物のいずれも、先行する二部とは無関係である。そのために三冊はそれぞれ独立した小説として論じられることが多い。いずれにせよ副題が示すとおり『首脳』は、第一次大戦の破局へと突き進んだヴィルヘルム ドイツの政治経済の指導者層を批判的に描いた長編小説である。後年大量に現れる第三帝国（ナチス）批判の小説、戯曲とくらべると、題材が珍しいと言えるであろう。その意味で『帝国』三部作全体としては、カール・クラウスの『人類最期の日々』と比較するべきであるかもしれない。またヘルマン・ブロッホの『夢遊病者たち』三部作に『帝国』三部作の影響が見られることも確認されている。⁽⁴⁾ともかく作者は、『首脳』では先行する二部よりもさらに本格的な社会小説を書くことと意図して、執筆に七年の歳月を要したのであった。

『臣下』が比較的早くから傑作と見られて、論文、作品解釈などが多く、邦訳も出ているのに反して、『首脳』は『貧しき人びと』とともに知られていないものである。アウフバウ書店版の全集がようやく一九八七年になって『貧しき人びと』と『首脳』を一冊本で刊行するまで、『首脳』はパウ・ツォルネイ書店の一九三三年版を最後に再版がなく、入手が困難な作品であった。

それではなぜこれまで知られざる作品でありつづけたのか。ハインリヒ・マン研究のなかでもワイマル共和国時代については、アメリカ亡命時代と並んで説明が進んでいない。一方第一次大戦前とフランス亡命時代についての検討はこの二十年間にかなり進んだと言えるが、こういった事情の反映がその第一の理由であるだろう。『首脳』が出た一九二五年ごろを境にこの作家の作品あるいは活動に現れる変化は、この小説の考察抜きでは理解できないのであり、その意味でも重要な作品なのであるが、小説もワイマル共和国での彼の活動もよく調べられて

はいない。あいも変わらず「文明の文士」像や非現実的で過激な知識人とみなす説に有力な反証を提出できないでいる。そのようなわけで『首脳』も『貧しき人びと』もわが国に紹介されたことはない。

知られていない第二の理由としては、例によって言うべきか、この小説の難解さをあげないわけにはいかない。(もっとも、同じく知られていない『貧しき人びと』は難しくも長大でもないが、こちらは作者の労働者観が未熟であるという評価が定着している。)(「表現主義的」「劇的」と評される、省略の多い、動きの激しい文体で語られる事件は、解釈者を悩ます謎に満ちている。比喩の対象が特定できない、あるいはその比喩が適切かどうか簡単に決められないというものがいくつもある。また事件の突飛な動機づけやグロテスクな結末が多く、「神秘的」傾向と評される現象が作中いくつもあって、たとえば登場人物が知るはずのない事件を予知したり、まったくの偶然に支配された事件があったりして、それらが作品で果たしている意味を正當に解釈し、評価することは容易ではない。そのため『首脳』をめぐる評価は、最も重要な作品の一つというものから完全な失敗作だとするものまで極端に分かれている。

『首脳』を扱った研究書は、影響関係やモチーフなど細部を分析したものは、最近になってようやく学位論文が何冊か出たが、その場合も作品全体の構造の分析や小説としての評価は慎重に回避されているので、大して事態が進化したわけではない。だから、かつて『ハインリヒ・マンの敵としてのドイツのゲルマニストたち』⁽⁸⁾を書いてこの作家の再評価をとねえたK・シュレーターが、今となってはハインリヒ・マンはパンを得るための学問の対象として通用するだけの知名度を得たのだから、『首脳』は顧みるに値しない失敗作だと安心して宣言してよいのだと、きめつけたりするのである。⁽⁹⁾

『首脳』が有名でないのは失敗作だからだと言ってしまうのは、あとで見るように確かに有力な説明の一つではあるのだが、スケール、作者の主観的な意図ともに壮大なこの作品を読んで、いらだちやもどかしさを感じながらも、ある種の面白さを見出すことまでも否定することはできないであろう。歯切れが悪い作品論が散見されるのもまさにそのためなのであるから。

ともかくハインリヒ・マンには『臣下』と『貧しき人びと』のみで満足できず、さらにヴェルヘルム・ドイツ体制の権力の中枢を描きたいと考える必然性があった。『ゾラ論』（一九一五年）でゾラに仮託して「唯美主義は希望を殺す時代の産物である。」と言った時、彼の念頭にあったのは言うまでもなくドイツ第二帝政の現実であった。エッセイ『若い人たち』（一九二五年）で、彼は『首脳』の意図を次のように解説しているが、これはまったく同じことを言っているにひとしい。「一八九〇年にも優秀な世代が育っていたのです。これまでに最良の世代だったのかもしれませんが。（中略）ただ君主政治下の権力のシステムは動かしがたく、知識人たちの登場も事態を変えませんでした。わたしの新作『首脳』はあの悲劇的な世代を扱っています。才能ある人間は文学の世界を選ぶばかりはなく、権力の側には指定席しかなかったのです。批判勢力は、どれほど改善の意欲にすぐれているようにとも、局外にとどまらされました。⁽⁴⁾」

この「指定席」ばかりの「権力」のただなかに『ヴォルテール対ゲーテ』（一九一〇年）や『ゾラ論』を書いた行動主義の時期の作者自身を思わせる主人公テラと、権力欲は強いけれども「理念」にもとづいて行動する人物マンガルフがもぐりこむことに成功して、二人が自分の理想を追求すればどうということが起こるだろうか。『首脳』は、その実験の結果を報告した小説だと規定することができよう。⁽⁵⁾

作者がこの小説の構想にとりかかった一九一八年には、まだ第二帝国は存在していたのであるが、新しい理念の下に誕生したはずのワイマル共和国で、彼は帝政時代と変わっていない現実に直面する。たとえば一九二三年の憲法祝賀講演で、彼は、ワイマル憲法の存立の基礎を揺るがす現象として、富の少数者への過度の集中と彼らの支配欲、戦争を呼号する国粋主義者たちなどをあげて——これは『首脳』の世界そのものである——反動勢力から憲法を守ろうと呼びかけている。⁽⁶⁾「帝国」批判は、作者にとって完結してしまった過去の事実の確認ではなくて、共和国をおびやかす危険な現実との対決を意味していたのであった。

(二)

ストーリーが展開する時間は、一八九一年から、第一次大戦の戦局が傾いた一九一七年まで、主人公のテラとマンゴルフは、作者と同じ一八七一年にリーハーベックらしい町に生まれ（ドイツ統一の年でもある）、二十才の法科の学生で登場し、四十六才で死ぬ。テラの父は、町の有力者で国の内外で手びろく穀物の取引をおこなっている。テラの妹でまもなく女優になるレアは、マンゴルフと愛しあっているが、それぞれ政界での出世と女優としての出世が大事で、愛と野心の相剋に悩むという、この作家が初期に好んで扱ったテーマを展開する。マンゴルフは、将来の履歴のためにクナック財閥（クルップ）の娘との愛なき結婚を選ぶ。しかしそれで問題が片づいたわけではない。テラは、宰相ラナス（ビュロー）の娘アリスを多年にわたって愛しつづけるが、彼は弱い人間でその愛に踏みきれないという短編『ピッポ・スパークノ』の詩人マリオ・マルヴォルトのタイプで、一方のアリスは、テラを愛しながらも権力への愛着断ちがたく、父のラナスを宰相に押し上げ、その地位を維持させること

に心を砕き、また自分の夫は将来宰相となる人物でなければならないという考えがあり、マンゴルフの一代前に宰相となる前途有望な人物トルレーベン（ペートマン・ホルヴェーク）とのこれも愛情のない結婚をこばむことができない。『首脳』は、すでに述べたように主人公二人を政財界に食いこませることによって、ドイツ第二帝国の指導者層の構造を描いた小説であるが、彼らの公的な場所での成功と失敗という第一のストーリーと平行して、愛の挫折といういわば私的な第二のストーリーが展開していて、後の話は、ハインリヒ・マンの読者にお馴染みの人物と観念の構図なのである。また軍需産業の大立者クナックが実在の人物クルップを指しているように、帝国上層部の人物数人が作中人物のモデルで、いくつもの実在の事件を背景に活動するという意味で、モデル小説の性格をもっている。そのほかにも親友でありながら、しばしば敵同志にもなるテラとマンゴルフの関係を、ハインリヒ・マンとトーマス・マンの『ゾラ論』と『非政治的人間の考察』の論争の反映と考えると、マンゴルフはトーマス・マンであるとして、テラはヴェデキントを、マンゴルフはマクシミリアン・ハルデンをモデルにしたものだとして、あるいはまたテラの生涯に作者の「内的自伝」を見てとるなど、さまざまな解釈があるが、本稿ではこれらの解釈を小説の構造分析にとっては二義的なものであると考え、第二帝政の指導者層批判という作者の意図がどれだけ達成されているか、この小説の結末が作者にとってどういう意味をもっていたかを検討するのみにとどめる。

テラが、「理性」を唯一のよりどころにして「人間の品位」を傷つける社会に立ちむかっていく、『ゾラ論』の作者ごのみの行動主義者であることは、すでに述べた。あるいは一九二三年に時の共和国首相シュトレゼマンに右翼の「暴力の独裁」の現状に代わる「理性の独裁」「正義の独裁」を要求した作者ごのみだと言いかえてもよ

い。⁽⁷⁾ もっとも、この観念的な過激さをハインリヒ・マンはまもなく捨て去るのではあるが。

テラの「理性」について若干の補足をおこう。彼は、「事実から出発せず、理念のみに頼る」(518)種類の人間であり、「使命感と指導者の責務」(380)を感じており、「ぼくは、政治家ではない。ぼくの導きの星としてはただ生に仕える理性あるのみだ。」(528)と言う。小説の終わりでテラは、妥協することなく理性のみを信奉した自分の生涯を自己批判するが、全面的な誤りと認めたわけではない。テラにとっての「理性」は、一九一〇年代のハインリヒ・マンの「精神」に匹敵するものであると、さしあたり規定しておこう。

さて、テラが公的な地位につく以前のエピソードは後で見ることにして、貧乏人専門の弁護士となって、ストライキに参加した労働者の弁護に従事していた彼は、宰相ラナスのお声がかかりで自由保守党の代議士になり、ラナスの政策を援護する演説などをして順風満帆であったが、死刑廃止をラナスに要求して相手にされず、次にヴィルヘルム二世に直接要求して、皇帝から笑いのものにされ、彼の社会的信用は地に堕ちる。その時彼の有能さを目につけたクナックに拾われて法律顧問となり、のちには財閥の総支配人にまでなる。テラは会社の幹部たちをあざむいて、企業の内外でスパイ活動をした結果、軍需産業の利害が政治を動かして戦争を起こす現実を知り、軍需産業が国際的に相互に投資しあっていたがいに安全を確保しているため、戦争で国民が滅びたとしても軍需産業は利潤を確保し、生き残るであろうという事実を突きとめる。独仏二社の秘密協定の文書を手に入れた彼は、宰相ラナスに向かって、重工業の横暴を抑えて戦争を避ける唯一の道として、「炭鉱鉦山国有化法案」の推進（これはかつてビスマルクも考えたことがあるという）、⁽⁸⁾「上からの革命」(510)の実現を迫るが、またもや非現実的であるとしてとりあげられない。戦争直前テラは、宰相トルレーベンを平和への道を妨げる元凶と見て、(のちに

これが誤りだったと考えるが）、自動車事故を偽装して、暗殺する。開戦と同時に年来の活動がばれて、クナツク社を解雇され、軍法会議の書記、再度の貧民の弁護士、サーカス稼業などを転々とする。正義を実現しようとしていつも陰謀に頼らざるをえなかった孤独なテラは、行きづまり、傷心の極ピストルを携えて、親友がいる首相官邸へと向かう。

権力に一步一步確実に近づいて行くマンガルフの方は、テラにくらべて動きに乏しい。ラナスの有能な秘書となったマンガルフは、野心を実現するために、国粹的な圧力団体「全ドイツ連盟」（一八九一年設立、大ドイツ主義、膨張主義、反ユダヤ主義などのイデオロギーでナチスの前身とみなされる）に入って活躍し、出世のためにクナツクの娘婿になる。彼の野心は、権力の頂点に立って財閥、軍部などを牛耳り、戦争によってヨーロッパ統合を（ヨーロッパ統合は二十年代の作者の夢でもあった）果たすことである。ラナスの娘婿となったユンカー出身のトルレーベンとの出世競争で、毛並みが違うために後塵を拝しはしたものの、前任者の死後大戦のさなか宰相に指名された彼は、自分の夢が事実誤認にもとづく幼稚な幻想に過ぎなかったことを思い知らされる。あやつられているのは、実は政治家の側だったのであった。軍部の圧力に屈して潜水艦の無制限攻撃を承認（一九一七年二月）した彼は、深夜官邸に現れた親友と二人で、死を選ぶ。マンガルフもテラ同様「理念」に生きる知識人として思想上の敗北に耐えられなかったのである。

プロイセン ドイツがいかに描かれたかの検討に先だって、この小説のプロローグと政界入り以前のテラをめぐる突飛なエピソードなどにふれておかねばならない。全体の三分の一近くを占めるこの部分の寓意の意味する

ところについては、近年解釈が出そろい、一致を見ている。

まず初版本で六三七ページの小説の冒頭には「九十年前」と題する、六ページの、本文と無関係な筋の短編がおかれている。(すでに短編『人殺し』として発表されていた。)⁽⁹⁾ 内容は、テラたちの物語がはじまる九十年前のナポレオン戦争の時代に、テラとマンゴルフの先祖二人が、最前線のフランス軍に接触し、フランス軍に穀物を納入すれば二人のうちの一人に最高の価格で支払い、あとの一人には支払わないという条件を提示されて争い、一方が他方を絞め殺す。まもなく戦闘から帰った将校たちは、この凶行を見て、残った一人を近くの木に吊るしてしまふ……

この挿話は、のちのテラとマンゴルフの運命を読者に予知させる伏線になっているとともに、さまざまな登場人物が殺され、あるいは自殺する物語のいわば最初の基調低音を響かせ、第二帝政全体を支配している、強者が弱者を滅ぼす、一九世紀末の支配的イデオロギー「ダーウィニズム」の現実と、戦争は商売であるという皮肉な主題を提示するものである。

次は、父の死と生家の破産にあい学業を一時放棄したテラが、ミュンヘンに出てオクトーバーフェストの掛小屋(十五日つづく)の一つ、回転木馬館の持主という予想外の職業についている時の話である。この職業に関しては、回転木馬が永劫回帰の雛形であるとか、将来政治家になるテラの支配欲と人心操作の比喩であるなどと作者は暗示しているが、それはさておきテラは、深夜木馬館の前で祭りの出しものに出ているレスラー二人が些細な利害の対立から、凄惨な殺しあいをはじめのを目撃する。そして「これが、ぼくたち人間が最初にすることだ。最初にもつ関係で、最初に残す痕跡だ。」(88)と考える。二人の巨人は、血の海の中に折り重なって倒れて、

死んでしまう。そしてこれからあと全篇にわたってライトモチーフのように、この殺人事件が想起され、あるいは「流血」のイメージが出てくる。「ダーウィニズム」の当然の結果は「流血」なのである。『首脳』は、最初『血痕』と題される予定だったという。⁽⁹⁾

たとえば、テラがはじめてラナスに向かって死刑廃止を訴える場面で、緊張している彼の脳裏を去来する想念は、次のように描かれている。「支配人（次の挿話で出てくる）は死んで、肘掛椅子から落ちかかっていた。殴り殺されたレスラー二人は、抱きあつて死んでいた。小路から人殺しの叫え声が響き、血痕が消えない大通りは、時代をさかのばれば戦場の片隅だった。そこでは多くの先祖の一人が友人を殺すか、逆に殺されるかした。このあとの時代には、そこでなにが起こるのだろう。あらたな殺しあい、あらたな兄弟殺しだろうか。彼は自分がマンガルフと格闘していると感じた。叫ぼうと思った。しかし、こう唸っただけだった。△死刑を廃止してください。▽」（217）テラによると死刑は、国家が権力維持のために要求する「流血」であり、すべての権力は、「血の権力」だという。

もう一つ血のイメージの例をあげると、開戦直前のある日マンガルフは、公用車から外を見て、すでに大殺戮戦がはじまったも同然なものにまったく気づいていない群集に違和感を覚える。彼は、広場じゅうの群集が膝まで血に漬かっている幻視に震える。「広場でいまだに血に気づかない群集は、ころのなかではすでにそれ（血）が流されることを了解している。あらたに獲得した行動のエネルギーであまりにも長かった平和による頹廃と無秩序を一扫するつもりなのだ。」（547）「帝国」の世界は必然的に流血を要求するのである。

さて、木馬館を去ったテラは、ベルリンに出てまたしても奇妙な職業につく。レアの友人の俳優の推薦で「生

活万般代理業⁽⁹⁾」という組織の広告部長になるのである。この組織は会員から金を集めて利益をあげ、会員に還元すると称しているが、実は詐欺が目的であることがまもなくわかる。支配人のフォン・プラスは、この会の指導理念は一にも二にも「成功」であると言って、テラを激励する。会の組織は、「事業」と「娯楽」の二部門に分かれ、「娯楽」部門は、宮廷と接触を保つことと、展覧会、演奏会などの開催をおもな仕事としている。テラの初仕事は、皇帝みずから執筆するという恩寵をテーマとしたオペラ（あとで嘘とわかる）を宣伝する文章を新聞雑誌に載せて、会の名を揚げることである。彼は、ハウプトマンをモデルとした詩人フンメルと近づきになり、ここでハウプトマン風刺が展開され、さらに妹のレアがフンメルの戯曲に出演し、話は入り組んでいくのであるが、この「代理業」は「帝国」を風刺する比喩であるらしい。会員から集めた金を、支配人はいわば営業マンであるモーアヒュンなる人物に託する。ところがこの男は、その金を賭博につぎこんでいる。すなわち会の浮沈は、賭博の勝負にかかっているのである。しかもモーアヒュンは、「重工業家の強力な団体の指導的地位にいる」⁽¹⁰⁾というし、前途を囑望されている貴族の少壮政治家トルレーベンさえも、この会から利益を得ている。七万マルクをもって仕事に出かけたモーアヒュンの帰りが遅れ、窓口で会員が取りつけ騒ぎを起こして、支配人は絶望して自殺し、会はテラが勤めたその日に消滅してしまう。

そこで、H・ケーニヒによれば、支配人は帝国宰相を、モーアヒュンは国民の金を軍備に蕩尽してしまう帝国の重工業家たちを表し、したがって「帝国」は、嘘と詐欺で固められ「成功」を指導理念とし、賭博の勝ち負けに依存している「代理業」にたとえられているということになる。⁽¹¹⁾なぜなら、「皇帝のむら気」も賭博と同じく偶然に支配されていて、帝国の支配人である宰相は、この偶然に賭けているからである。宰相ラナスは、皇帝に

テラを紹介する前に言う。「ハ皇帝はここにお残りになる。皇帝がどうお決めになるかは、いつもルーレット賭博と同じです。突然彼（ラナス）の顔には、懸念のためにしわが現れた。ハわたしの技術と器用さのため、たいてい狙った番号が出るのだと言われています。」（337）。

ケーニヒの解釈はたぶん誤りではないだろう。しかしこの奇抜な挿話の意味を一読してただちに理解することもある困難なのである。テラとマンゴルフの戦いを通して明らかにすべき帝国の特質を、その戦いがはじまる前にこのような不自然な比喩と風刺で示すというのは、細部の解釈の是非もさることながら、まず小説の構成上の欠陥と見るべきところであろう。読者としては、『首脳』の体制描写のとは口ですでにいやな予感をもたされることになるというものである。

テラの生涯にわたって侯爵夫人リリという奇妙な女性が伴侶となる。彼女は郷里の町で二十才のテラの前に現れ、テラはリリと駆け落ちをはかるが、彼女は指定した場所に来ない。このうち彼女はテラの子供をみごもるが、テラはまだ知らない。つづいて「生活万般代理業」の広告部長になったテラの前に、支配人フォン・プラスの妻となっているリリが現れる。（テラとの出会いには偶然が多い。）リリは、のちにテラとマンゴルフのライバルとなるトルレーベンとも親しく、ベルリンの上流人士と交際しており、テラの学業を継続させ、その学資を出し、一時はテラとの結婚も考える。ベルリンの貴族社会の高等娼婦となった彼女はさらにマンゴルフの娘を生む。マンゴルフとトルレーベンの決闘騒ぎが起った時、トルレーベンをなだめるために、テラと語らってその娘をトルレーベンの子供だと信じさせてしまう。テラは一生独身であるが、のちに息子が成人して国粋主義に心酔し、息子に自分の平和主義を否定されることになる。

(三)

出世コースを歩みはじめた二人の青年の前に、第二帝政の体制は具体的な姿をとって現れる。それは、全ドイツ連盟であり、皇帝ヴィルヘルム二世であり、指導的な政治家と結びついている大工業家であり、それらの勢力のあいだで、バランスをとることで政權を維持している帝国宰相である。

全ドイツ連盟は、皇帝にさえ気兼ねさせる勢力で、財界の支持を背景に大きな影響力をもち、声高な発言で世論をリードし、その好戦的な姿勢のゆえに歴代宰相の頭痛の種であり、「第二の政府」と言われた。作者はこのグループを露骨に戯画化している。全ドイツ連盟の指導者たちは、皇帝にも宰相ラナスにも、夜会の人びとの面前で公然と艦隊増強と英仏敵視策を要求する、知性とユーモアに欠ける人びとである。とりわけ連盟の副議長で高名な外科の教授（実在のハッセ教授がモデルとされる）は、太鼓腹でひどい方言をあやつり、いつもヨードホルムの強烈な匂い（死の匂い）を漂わせて、滑稽だが不気味な人物にされている。なおこの一派のフィッシャー提督は、皇帝と組んで一八九八年以来第一次から第四次にわたる艦隊建造計画を推進して、帝国の財政に過大な負担を強い、歴代の宰相とのあいだにあつれきが絶えなかったティルピッツ提督をモデルとしており、小説中でもラナスやトルレーベンにとって、邪魔になるが皇帝の庇護のために除くことができない相手である。また連盟の中にはその艦隊建造計画を推進しようという「艦隊連盟」（これも実在した）の一員を兼ねているものもいる。

次は皇帝ヴィルヘルム二世である。皇帝自身が登場するという意味でも『首脳』は珍しい作品の一つであるのだが、彼は、帝国の政策を決定し、失策を犯して宰相に尻ぬぐいをさせ、宰相の首をすげかえ、「議會政治が死

んだ」(530)と言われる。皇帝は伝えられている像とはほぼ一致した描かれ方で、お天気屋で、自己顕示欲が強く、つねに賞讃を欲し、そのくせ気が弱くて、一貫した態度で責任をとることができない。そのような皇帝に依存している体制は、若年のマンガルフの目には次のように映る。「私的な利益を追求する諸集団が議会の外で影響力を行使している。皇帝は顧問たちを選ぶ。帝国宰相がうまくやれる否かは、彼がどれほど皇帝をこれらの集団の諸計画の味方にするかので決まる。一方皇帝は、多分彼の宰相を使って人びとを丸めこむ必要があると考えているようだ。これが体制なのだ。変える理由はない。」(393) 同じことをラナスの視点から見ると、「皇帝はひどい病人だ。彼が沈みこんでいると、こちらの思いのままだ。再び昂揚した気分になると、それほどうまくゆかない。」(433)ということになる。ラナスは、皇帝の暴走を防がねばならない。一方で彼は、「民主主義という名の工業の絶対主義」(535)という事態を正確に認識している。つまり、帝国宰相の仕事は、ラナス自身によれば、皇帝、大工業家、議会のあいだで「見事な釣り合い」(533)を保つことにある。政権についた当初上り坂の時の彼は、自分のバランスをとる腕前に自信と誇りを感じている。

のちに皇帝が「デイリー テレグラフ」紙のインタビューに応じて機密事項をしゃべり散らし、世論は激昂し、国会で論議が交わされるということがあった。(デイリー テレグラフ事件、一九〇八年一〇月)宰相ビューローはもはや世論に抗してまで皇帝を弁護せず、皇帝もまたかつて恩寵を施した宰相に悪感情を抱くにいたり、世論が軟化した時ビューローは孤立して、これが彼の失脚を早める原因の一つとなった。

作中この事件を踏まえた場面では、ラナスは皇帝を「有害な病人」「保護を要する未成年者」(533)だと言って嘆く。宰相の仕事は、「名声をほしがる弱い、臆病な君主に依存して」(428)、「今日はこれと組んであれにあたり、

明日は両者を敵にまわし、明後日は彼らと組んで第三者に対抗する」(314) ことである。しかも、この孤独な戦いを外部の者に気づかせてはならないのである。宰相ラナスは、テラにはじめて死刑廃止を要求された時テラの考え方を「理想主義的アナーキズム」(315) だと感じる。しかしラナスは、テラを庇護しつづける。彼は現状を肯定する人間であり、テラの提案を一度も受け入れはしないが、新しい思想に弾圧を加えることはなく、彼自身も体制の犠牲者、体制が強い「綱わたり」(433) をしつづける。大工業家、全ドイツ連盟などの圧力にむなしく抵抗しつづける側面から描かれていて、孤独で気の弱い知識人として、むしろテラの同類である。

大工業家たちは、結局これらの諸勢力を背後であやつっている。ラナスとトルレーベンとの二人と親しかったクナックは、トルレーベンとの仲が決裂するとすぐにテラとマンゴルフを味方に引き入れて、政界にくさびを打ちこんでおくことを忘れない。全ドイツ連盟はクナックの息がかかっているし、皇帝とフィッシャー提督が進める英国との艦隊増強競争は、言うまでもなく、軍需産業には好都合のものである。軍部には抜け目なく賄賂も(435) 送っている。大工業家たちの集会での彼らの発言は、全ドイツ連盟、すなわち右翼と異なるところがない。「労働組合があと十年たてばわれわれを打ち負かす。われわれはやつつけられるのだ。だからもうぐずぐずしている時ではない。戦争をはじめればそれでけりがつく。厳しい処置をとるのが、結局のところ最も人間的なのだ。復興はわれわれがやる。そうやってはじめてわれわれの繁栄がやって来る。勝つかどうかは、問題ではない。敵は労働者の豚どもなのだから。」(562)。

大工業家の力を弱めようとしてテラは、炭鉱と鉱山の国有化案をラナスに進言して容れられず、(次の宰相トルレーベンが努力するが、社会民主党にまで反対されて成功しない、) さらにトルレーベン暗殺も戦争突入を阻

止しえない。マンガルフは、権力を握って皇帝、大工業家、軍部をあやつって戦争を遂行し、ヨーロッパ統合を果たそうと念願する。しかしこの計画も、すでに述べたように迷妄に過ぎなかった。二人の孤独な戦いは、最初から予想されたように敗北に終わる。二人は無意味につづく戦争に絶望して死を選ぶ。

(四)

作者は、先に引用した通り、「指定席」から成り立っているプロイセンの権力の構造への不満を小説に書いたのだと言っている。しかしテラとマンガルフは、ラナス、クナックらの庇護を受けて早くからこの権力構造の中で安定した地位を得ており、マンガルフ自身が閥閥を利用して昇進するのでもあり、かつ「指定席」に無縁な人間はこの二人以外には小説に登場しないのであるから、ユンカーたちだけで固められている指導者層の構造を批判するという作者の主張は、小説の中では焦点がぼやけてしまっている。作者の解説にもかかわらず、この小説のプロイセン批判の主題は別の二つの層から成り立っている。(一)第二帝政は理性が通用しない社会であった。差別と暴力に頼る体制、そこにはびこる臣下根性などが「帝国」の特徴である。すなわち理性を信奉する二人の主人公が第二帝政下で活動しようとすれば、その敗北は必然的であった。(二)政治を支配しているのは大工業家である。彼らが自己の利益のために戦争を起こすのであり、戦争でたとえ国が滅びても軍需産業は生き残る仕組みになっている。これは市場関係者の常識に過ぎず、知らないのは政治家だけである。

(二)はテラがクナック社内部でのスパイ活動の結果発見することになっているのであるが、まったく同じことを作者自身が『首脳』執筆中の一九二三年に力説している。この年、空前のインフレとフランス軍のルール地方占

領の事態を迎えて、すでにふれたシュトレーゼマン首相への公開書簡と、それと前後して「ベルリン日刊新聞」
「ノイエ ルントシャウ」に掲載した論文で、ハインリヒ・マンは、マルク暴落の結果中産階級の没落と富の寡
占体制が進み、巨大化した「経済」による政治支配がおこなわれその結果国粋主義の危険が増大している現状を
述べ、軍需産業が国境を越えて保障しあっている事情にもふれて、ワイマル憲法の規定にのっとりて国家が企業
に干渉すること、炭鉱、鋁山を国有化することを要求している。シュトレーゼマンは、この後まもなくレンテン
マルクの新設によって奇跡的にインフレを終息させ、フランスとの関係の改善にも成功するのであるが、一九二
三年のすさまじいインフレと並行してフリーゴ・シュティネスのマルク暴落を利用したばろ儲け、彼が所有する
会社の巨大企業化が進行していた。ハインリヒ・マンはさらに、『首脳』発表と同年の一九二五年にシュティネ
ス コンツェルンを風刺した短編『コーベス』をゲオルゲ・グロスの挿絵入りで発表して、企業が支配する不気
味な全体主義の世界を描いた。支配者コーベスは姿を見せることなく、彼の下で働く無数の人びとは毎日彼の徳
を称えるラジオ放送を聞かされている。徒手空拳彼に反逆しようとした、グロスが極端に頭でっかちに描いた知
識人の運命は、もちろん死以外にない。『コーベス』は言うまでもなく、『首脳』のさらにグロテスクな形での縮
刷版であった。⁽¹³⁾

またハインリヒ・マンは、『首脳』発表後に書いたエッセイ『われわれに共通の問題』で、小説の書評が、軍
需産業の悪を撃とうとした彼の意図をまったく理解せず、そのことに一言もふれていないことに対する不満をも
らしている。⁽¹⁴⁾

大工業家批判は、ハインリヒ・マンがワイマル共和国の混乱を背後であやつる巨大な悪であるとして、第二帝

政時代という背景に移して『首脳』で訴えたかった主題に違いあるまい。彼はこの問題をクナック財閥と全ドイツ連盟、軍部などとの結びつきという具体的な形で描写した。それにくらべると理性の権化である主人公テラの破滅によってヴィルヘルム ドイツ体制が理性の通用しない社会であったことを示すとは、これはまたなんという抽象的な主張であろう。しかし、ハインリヒ・マンにとって実はこれこそが『首脳』の本来のテーマだったのであって、(二)は執筆が長びく過程でつけ加えられたものであるらしく思われる。その証拠と言える一例をあげると、一九二五年三月十八日付のフェリクス・ベルト宛の手紙にはこう書かれている。「いま私の生涯で最も悲しい本を書き終えたところです。(……)これは同時代と過去に対する一種の総決算です。もし一九一九年か二〇年に終えていたなら、私はいろいろなことを知らないままだったことでしょう。インフレと金権政治が私の本の成熟度と完成度を高めてくれたかもしれないのです。」⁽⁶⁵⁾

それに先だって一九一九年、終戦を待って発表された彼のエッセイ『帝国と共和国』には、テラやマンゴルフのことを指しているとも解釈できる個所がある。「帝国の少数の、主流から離れたところで考え、認識していた者たちは、帝国全体を代表してはいなかった。彼らは全体にとっては予言者であり、先駆者だった。彼らは、偏狭な者たちがひぼうするごとく、敵方についたものでは決してなく、来たるべきドイツの側についており、従って来たるべき一つの世界の側に立っていたのだ。」⁽⁶⁶⁾

このエッセイで彼は、第二帝政が軍事力を至上のものとして、自然な人間性を抑圧した体制であったこと、「全ドイツ連盟」のごとき「臣下」たちに支えられていたことなど、『首脳』の主題の(一)の層と『帝国』三部作全体に通じる主題の解説ともとれる分析をしてみせている。同時に彼は、新生共和国への希望と不安を語っているが、

その不安はまだ具体的な性質のものではなかった。

このように見てくると事情はそう複雑なものではないことがわかる。ハインリヒ・マンは、一九一九年にこの小説を計画した当初は、「帝国」の差別と抑圧の体制を描くために、少数派で「先駆者」であつた人物の挫折の物語を展開することだけを考えていたのであろう。ベルトー宛の手紙で、その後の共和国での見聞、すなわち「インフレと金権政治」と表現されているものが、先に述べた主題の(二)の層に外ならないのである。ただし、これは推測の域を出ないのであるが、(一)の層の内容も最初の計画とは違っているのではないかと思われる。と言うのは、テラとマンゴルフの行動の結果が、『帝国と共和国』の「来たるべき時代の側に立つ予言者」などという理想化されたものではなく、冷たく突き放されているからである。(『コーベス』の頭でかちの知識人ザントは、さらに距離をおかれている。)

ここから先は仮説をたてるしかないのであるが、ハインリヒ・マンはかつてヴィルヘルム・ドイツの現実の中で『ヴォルテール対ゲーテ』『ゾラ論』などによって「精神」の反逆を説き、行動主義をとなえた。しかし行動主義は、反逆のイデオロギーとしては有効に機能し、風刺の傑作を書かせもしたが、現実の政治に抵抗し、あるいはこれに働きかけるプログラムとしてはなんら具体性をもたない。その行動主義の有効性を彼はワイマル共和国の激動する現実の中で疑いはじめていたのではないだろうか。作者とその行動主義を共有する主人公テラが、ヴィルヘルム・ドイツで抽象的、個人主義的な行動主義、人道主義を実行に移そうとすれば、八方ふさがりになるのは自明の理である。民衆との連帯など、テラの側にその見通しがまったくないのであるから、望むべくもない。しかし作者としては、自分の分身の性格を濃厚にもつテラを破滅へと追いこまずにはいられなかったのだ

ろう。そのことによって彼は、行動主義の超克を示したかったのである。

大戦の迫ったドイツで、あるいは戦争に熱狂する大戦初期のドイツでハインリヒ・マンは、自分自身をひそかに「予言者」「先駆者」になぞらえもしたのである。ヴォルテール、ゾラなどのフランスの知識人を先達とみなしていた時、彼は楽天的であった。つまりフランスの作家たちが行動を起こすと、必ず民衆が行動をとみにしたからである。しかし彼の場合民衆との連帯は問題にならず、少数の行動主義者たちは孤立したままだった。民衆と連帯しないかぎり、ワイマル共和国の反動勢力と戦うことは不可能である。小説ではテラもマンガルフも状況を正確に認識するのであるが、孤独で無力である。作者はひろん主人公二人を死に追いやった「帝国」の体制を告発しているのではあるが、読者をいらだたせる二人の孤独と無力にも作者の自己批判が感じとられる。というのも、従来の研究においては、作家ハインリヒ・マンの行動主義の終焉に関しての記述があいまいなのである。ハインリヒ・マンは『ゾラ論』当時の行動主義のイデオロギーをワイマル共和国のあいだ、一九三二年に亡命するまで持ちつづけていたと読める評伝が多い。そうではなくて、『首脳』の完成とともに彼の行動主義は終わっているのである。行動主義の時期の反戦思想、プロイセン批判とワイマル共和国時代後半のヨーロッパ統一思想への共鳴、フランスとの和解を提唱する発言などとのあいだには共通の要素として平和主義があるために、一見区別が困難なのである。

一九二五年を境にして、それ以後のハインリヒ・マンには行動主義の線にそった発言も作品もない。彼は民衆の啓蒙へと戦術を変えたのである。彼が亡命までに書いた四つの長編小説は、もはや天下国家の大問題を扱うことはなく、平凡な市民、無教養な女などが登場し、風俗描写があり、あるいは推理小説の筋立てで、いずれにして

もささやかな教訓で終わる。一九三一年に出た『大した代物』ではボクシングや自動車の疾走、飛行機による追跡まで出て来る。この時期に多数あるエッセイ、あるいは講演からは、共和国の現実へのきびしい態度表明が——一連の偏向裁判批判を除けば——姿を消す。彼は、エッセイで婦人のニューモードの断髪さえ話題にし、デパートで自作の朗読会を開くにいたる：

さて、作者にとって理性を行動原理とするテラの悲劇がどのような必然性をもっていたにせよ、主題の(一)の層を追求したために、この主人公が生氣と魅力に乏しい人物になることは当然避けられなかった。「帝国」の現実を最初から否定さるべきものと見ているこの人物は、体験によって成長するということがない。戦術の面でさえも賢明になることがないのである。その結果「帝国」の現実とあまりにもかけ離れた死刑廃止、炭鉱国有化案などを唐突にもち出して拒絶され、それだけで絶望を味わうことになる。彼が理想の実現にすこしでも近づこうと思えば、その度に陰謀をめぐらすしかない。陰謀をめぐらない時にはラナスの娘アリスとの実りのない愛の悩みにひたすらのめりこんでいる。

いま一人の人物マンガルフはどうか。彼は、小説の終わり近くでやっと政權を担当するまでは、すべてを犠牲にして、ひたすら待ちの姿勢にある。作者がこの人物にニーチェの権力哲学、大衆輕蔑を實踐させたとする解釈はあるが、これもさして重要な問題とは思われない。マンガルフは、クナツク家令嬢と結婚すること、アリスの夫トルレーベンに匿名の手紙でアリスとテラの仲を中傷し、トルレーベンに決闘を申し込まれるといった少数の事件のほかに、事件らしい事件を起こさない。テラと何回か対決し、あるいは逆に助けあって、その度に二人で議論を繰り広げはする。テラの意見を引き出す役割も果たしている。そしてレアとの、地位への野心と両立

しないが諦めきれない愛の描写が、二十才の時から開戦直前までつづいている。これまた無能な口舌の徒であり、退屈な人物と言うほかはない。むしろ敵役の方が個性があつて面白いと言えるのである。

この小説には、これもすでに述べたように、帝国の指導者層批判という主題のほかに、さらに愛と権力との葛藤という主題があつて、あとの主題は、作者にとつては『ヴォルテル対ゲーテ』（一九一〇年）で唯美主義の袋小路を抜け出して行動主義を宣言した時、すでに解決済みの問題であつた。久しぶりに持ち出した昔の主題は、だらだらと同じことを繰り返すばかりで緊張感を欠くが、なにより困つたことにここには解決がないのである。

恋愛の当事者四人（テラとアリス、マンゴルフとレア）に決断する能力がないために、長い歳月がもたらした事情の変化が彼らを最後に引き離すのであるが、ここにはかつての唯美主義の時期の傑作『ピッポ・スパーノ』や『ブランツィルラ』、『退位』などの世界のように、主人公が抱く信念が矛盾をはらんでいるために、一挙に破局が訪れて、その結末の悲壮美が感動を誘ふということがない。あるいは『種族のあいだで』のようにその矛盾が新しい境地へいたる契機になることもない。むしろ物語の筋を起伏に乏しいものとしてゐるし、テラとマンゴルフの弱さを印象づけるだけの結果になつてゐる。

ヴィルヘルム ドイツの体制と戦つて滅びるものの苦悩は、その犠牲者の視点から、しばしば内的独白で語られる。小説の後半は、三代にわたる宰相のそれぞれの苦悩の表白を軸に進行している。まず宰相ラナスと娘のアリスの、体制内でバランスを保つ苦勞がつづいて（これが最も長いのであるが）、皇帝、フィッシャー提督、全ドイツ連盟などのあいだで徐々に苦しい立場に追いこまれる過程が「ラナス体制」および「ラナス体制——その幸福と結末」と題する二つの長い章で語られている。ビスマルク以後最も長く政権の座にあり（一九〇〇—一九

年）強力に政策を推進したわけではないが、彼をはめる人に言わせれば、最後のリベラルな宰相だったとされるビューローをモデルとするラナスは、露骨に私欲を追求する圧力団体や大工業家、虚栄心だけの皇帝と違って、ゲーテを引用し、アリオストを原文で読める知識人であり、彼と娘の孤独な苦悩を描くことによって、作者は体制に内在する悪を描こうとし、それはかなり成功している。しかしその苦悩の描写は、これと並んでアリスとテラの、またマンゴルフとレアの、解決がないために感傷的なだけの愛の苦しみが綿々と述べられているために、効果をそがれてしまっているのである。

それにしてもなぜ作者は、テラとマンゴルフを、人を愛せない、弱い人間にしたのであろうか。それは、作者ハインリヒ・マンがこの二人を十分に満足できる肯定的人物と見ていない証拠ではないだろうか。ハインリヒ・マンは、行動できない人間、弱い人間を描く時、初期から一貫して愛する能力の欠如という性質を強調してきた。だからこの小説でも彼は、テラとマンゴルフの人間としての弱さを意図的に描いて、「理性」を奉じる理想主義者の限界を示そうとしたのであろうか。このように疑ってみる値打ちはあるように思われる。ただしテラの限界をこのような形で明示すれば、「帝国」批判の効果は弱まらざるをえない。

しかしながら以上の疑いに対しては強力な反証をあげることができる。すなわち作者は、たんに愛と権力の主題だけではなく、これも彼の読者にはお馴染みの兄妹愛の主題を展開しているからであり、テラとレアがたがいに繰り返し相手を思う真率さには、作者の距離がほとんど感じられない（これはもちろん小説の出来栄えにとつては長所を意味しない）からである。ハインリヒ・マンは、長編『愛の狩獵』（一九〇四年）、短編『女優』（一九〇六年）で、美しい女優の仕事と愛の葛藤を描き、一方そのモデルのカルラは、兄ハインリヒの当時の芸術観、

生き方を模倣して、後世の研究者に兄との近親相姦またはそれに近い関係を推測されているが、カルラは一九一〇年にやはり仕事と愛の葛藤から自殺している。兄は、これを悼んで翌一年には三幕の戯曲『女優』を発表している。

ハインリヒ・マンは、テラとレアの兄妹に託して妹カルラへの哀惜の念に再びはけ口を与えたのである。二十オのテラがリリを愛するの、その後アリスに出会ってからアリスを忘れることができないのも、すべては彼女たちが妹に似ているからであって、心底ではテラは妹を慕っているのであるというし、レアの方でも同様に兄を思いつづける。作者は、主人公たちの不幸な愛に冷たく距離をおくどころか、共感をこめて描きつづけているのである。しかしそうになると、作者には小説を構成する際に見込み違いがあったのだらうということになる。

『首脳』でハインリヒ・マンは、ヴィルヘルム・ドイツの指導者層を風刺的に描き出すことには成功したと言える。時に風刺が行き過ぎて歴史的事実の枠をはみ出すことはあるが、大筋としては明快で、具体的でとくに解説を必要としないのである。ところがこの体制を否定する力強い、現実的な人物像の創造には、彼は成功しなかった。その結果体制批判は腰ぐだけに終わっている。ハインリヒ・マンには否定的なL・ヴィンターの意地の悪い次の一節は小説の欠陥を的確にしている。『首脳』の主人公が駆使するレトリックの技巧を見ると、その作者が主人公同様自分を政治的指導者だとは思っていないで、道徳的な覚醒を説教しているに過ぎないと思っていことがわかる。⁶⁸⁾

専制政治、帝国主義的侵略政策、資本家の事実上の独裁、これらをテラは正しく見抜いたのであるから、彼は有効な抵抗運動を組織しなければならぬし、そのために市民、労働者、野党などに理解できる政治的批判ない

し啓蒙活動をおこなわなければならないところである。ところが彼が振りかざす「理性」の要求は、「道徳的説教」と同じで、現実を変える力がない。あるいは、こう問うこともできるであろう。そもそもテラの理想を受け入れる社会がどこかにあるのだろうか。つまり「理性」が基準だというのは、特定の社会への批判としては具体性に欠けるのである。ハインリヒ・マンは『赤と黒』のジュリアン・ソレルの運命を次のように評している。「この小説では体制が裁かれている。最も有能な人間のひとり若い生涯のすべてを偽善者として過ごさねばならず、結果は殺人を犯すことで終わってしまった。これは一つの時代に向けられた最も恐ろしい告発である。」この言葉はテラとマンガルフの運命にもあてはまるのではあるが、スタンダールの主人公の強烈な個性ときわめて具体的な野心にくらべて、テラの「理性」とマンガルフの「ヨーロッパ統合の理想」は、いかにも影が薄いのである。テラは、結局彼が憎む体制とほとんど一戦も交えることなく敗れ去ってしまい、いわば一人合点で絶望の淵に沈むことになるし、マンガルフにいたっては、ようやく宰相の座についたものの、軍部の圧力に抵抗できないまま、自殺してしまう。テラがおこなった「上からの革命」を含めての政策上の進言、スパイ活動、暗殺の陰謀などは、たとえば社会主義者の政治闘争と比較すれば、その幼稚さが明らかにになる。それというのもテラは、小説の終わり近くでフランスの社会主義者に会い、彼の民衆との連帯、明るい信念に感銘を受けるのであるが、この教訓が生かされることはない。テラは、「貧民の弁護士」になってストライキをした労働者の弁護を仕事としたというが、彼にはエリート意識があるばかりで、労働者たちと連帯する方法を知らなかったのである。彼は、作者と主人公自身の意識は別として、実は政治活動をしているのではなくて、むしろ「道徳的」な要求をしているのだとも言えるからである。と言うことは、テラという人物を創造した当時の作者ハインリヒ・マンに、反動

勢力を真に政治的に批判できる視点がなく、労働者大衆に訴える方法がなかったということの意味するのである。そう言えば、ハインリヒ・マンの行動主義を標榜したエッセイの傑作にも、見方を変えれば、目標の実現は二の次の「道徳的説教」という一面が確かにあった。作者は、テラが陥る悲運に自戒と反省をこめているものと思われる。

作者は『帝国』三部作の最後を飾る大作を意識して、彼のこれまでの主題を次々と展開してみせる。成功すれば、愛と政治運動とを扱った壮大な社会小説が誕生するところであった。しかし『帝国』の指導者層批判という目的のためには、女優のレアや侯爵夫人リリは不要な人物である。すなわち愛と権力の矛盾の主題、および兄妹愛の主題は、体制批判の主題を弱める方向に作用しているのである。ハインリヒ・マンの場合の、行動するヒーマニストの愛と人間としての強さとの関係については、拙論『ハインリヒ・マンの歴史小説ハアンリ四世Ⅴについて』でまとめたことがあるので、再論することは避ける。結論だけ書けば、彼は、従来『ウンラート教授』のラートや『臣下』のヘスリングのごとく否定的な人間像を描いて成功をおさめてきたのであるが、『首脳』ではじめて人を愛する行動的な人間、作者自身が真に共感し、肯定できる人間を創造することを試みたが、果たせなかった。愛と出世の葛藤に弱々しく悩む人物に権力との有効な闘争ができるはずはないのである。権力欲などなく、おおらかに人を愛しながら、お題目でない具体的な政治的目標を達成する強い人物の創造は、『アンリ四世』まで待たねばならなかった。『首脳』を完成した年の一九二五年にハインリヒ・マンが『アンリ四世』の素材を発見したのは、その意味で偶然ではなかったのだった。

最後に「首脳」という表題について、若干の考察を加えておかねばならない。首脳とは、第二帝政の指導者層

を指すのではなくて、テラのことを言っているのである。多年にわたってテラに心服し、軍需産業の機密をさぐる手伝いなどとして来た元俳優のクーアシュミットが、さらに次の活動に必要な時いつでも自分を使ってくれと言つて、「首脳はあなただ！」と叫ぶ（396）。一種の反政府活動に従事している人物が、テラを自分の希望の星と見たわけである。しかし惜しむらくは、こう言われた直後にテラが実行する宰相トルレーベンの暗殺計画は、陰險、卑小なものである。すなわち宰相暗殺計画は、正義のためという大義名分さえ怪しいのである。四角ばった不器用な大男のトルレーベンは、古い家柄のユンカーの出で、「ビスマルク」とあだ名され、風刺的描写の対象であり、テラは早くから宿敵と意識していた。しかし宰相の地位についてからのトルレーベンは、妻のアリスの影響もあつて、毎日敬虔に神に祈り、議会では平和主義的政策を推進しようと努力し、もはやテラにとって危険な存在ではなくなっており、テラがトルレーベンを励ましたことさえあったのだった。ところが宣戦布告は避けられないという段階になってから、テラは大勢の人が死ぬ代わりに一人が倒れねばならぬと考える。テラは迷つて、いったん計画を中止しようかとさえ思った。計画は成功するが、戦争防止という点では、なんの効果もないばかりか、テラの親友でアリスの兄のエルヴィンがトルレーベンの車に同乗して死んでしまう。テラとアリスは涙ながらに「永久に」（606）別れることとなる。

テラを反戦運動の「首脳」にするのであれば、このような愚劣な陰謀の主謀者にするのは妥当ではないと言いたくのところである。最近の研究によるとテラがクナック社の機密を暴露する部分は、作者がリープクネヒトの大戦前の活動にヒントを得て書いたものだという。⁽²⁾しかしハインリヒ・マンが借用したのはこまかいデータだけだったのである。仮に作者がリープクネヒトの活動をその通りなぞっていたならば、その活動がやはり戦争

を阻止しえないにしても、少なくとも小説中のテラほど卑小には見えなかったことであろう。のちの『アンリ四世』に即して言えば、陰謀をめぐらして、暗殺を実行するテラは、ルネッサンス時代のアンリ四世の政敵たちと同じレベルにいることになる。それとも作者は、テラを意図的に落ちぶれさせたのであろうか。そのように解釈する可能性は残されている。ただ作者は、テラとマンガルフを徹底的に敗北させ、彼らにドイツの少数の行動主義者の限界を示させたにしても、なお彼ら二人を全面的に否定してはいない。自殺する前のマンガルフは、しばしば自室の壁にかかったキリスト受難の図を眺めている。折り重なって死んだ親友二人の体は十字架の形になったという。作者は、この二人が「予言者」であったことを暗示したかったのである。

注

引用は Heinrich Mann: „Der Kopf“ Berlin, Wien, Leipzig (Paul Zsolnay Verlag), 1925 に于ける。引用ページ数はかっこ内のアラビア数字で示した。

- (1) Lützel, Paul Michael: Heinrich Manns „Kaiserreich“-Romane und Hermann Brochs „Schlafwandler“-Trilogie. In: Heinrich Mann. Sein Werk in der Weimarer Republik. hrg. v. H. Koopmann u. P.-P. Schneider, Frankfurt a. M., 1983, S. 183-210.
- (2) Schröter, K.: Heinrich Mann. „Untertan“, „Zeitalter“, „Wirkung. Stuttgart, 1971, S. 60-71.
- (3) Dito.: Zwischen Autobiographie und Zeitgeschichte. Zu Heinrich Manns Roman „Der Kopf“. In: Heinrich Mann. Sein Werk in der Weimarer Republik. hrg. v. H. Koopmann u. P.-P. Schneider, S. 169-182.
- (4) Mann, H.: Ausgewählte Werke in Einzelausgaben. (以下 AW と記す), Bd. 12, S. 161. なおハインリヒ・マンによれば、一八九〇年ごろからの数年間に第二帝政で最も自由な「中休み」の時期であった。その後国粋主義が台頭して、事態が悪化したと云ふ。AW, Bd. 12, S. 102-103.

- (5) Emrich などの見解がある。Emrich, E.: Macht und Geist im Werk Heinrich Manns. Eine Überwindung Nietzsches aus dem Geist Volaires. Berlin, New York, 1981, S. 361. など。『Schlichting 15』430-436 Emrich なども用いている。見解や材料については、雑誌などから採りあげ、Schlichting, R.: Heinrich Mann und Friedrich Nietzsche. Frankfurt a. M., Bern, New York, 1986, S. 718.
- (6) Mann, H.: AW. Bd. 12, S. 141-150.
- (7) Diktatur der Vernunft. (später: Herr Reichskanzler! Sie gehen bis zum Verrat.) In: Vossische Zeitung. Berlin, Jg. 220, Nr. 481, 11. 10. 1923, S. 1 (Leitartikel). Mit Vorspann: „Der Dichter Heinrich Mann sendet uns folgenden, offenen Brief an den Reichskanzler“. 同年他の三つの論文(の4つ) Die Tragödie 1923 の4つ目論文からなる。この憲法保護講演の4つ目単行本出版がある。その巻頭を讀んだ。Diktatur der Vernunft. Berlin (Verlag Die Schmiede), 1923, S. 7-16. 附録14 Die Tragödie 1923 の四編目と異なる。AW, Bd. 12, S. 126-135.
- (8) In: Berliner Tageblatt. Berlin, Jg. 47, Nr. 658, 25. 12. 1918, Beibl. 2 44-45 Mann, H.: Der Jungling. Novellen. München, 1924, S. 59-70. auch in: Das Gute im Menschen, Novellen 2. Düsseldorf (Claassen Vlg.), 1978, S. 611-615.
- (9) König, H.: Heinrich Mann. Dichter und Moralist. Tübingen, 1972, S. 168. など。この小説の有名な登場人物は非業の死を遂げるものをめづつて、次の通りである。テラ・メンゴルフ・レー(以上自殺)・ホルヘーベン(暗殺される)・ラナスの息子エルヴィン(暗殺の巻き添えで死ぬ)・侯爵夫人リリ(息子のクラウスに殺される)・クラウス(戦死)。ラナス父娘を除けば、全員が異常な死に方をする陰惨な結末を迎える。
- (10) このエピソードのモデルとなる現実の事件があり、作者は新聞記事などを集めて、事件を研究したと云ふ。ibid.: S. 179.
- (11) ibid.: S. 179-181.
- (12) 対への鑑観44-45 Ihr müßt wollen. (später: Das Sterben der geistigen Schicht). Berliner Tageblatt. Berlin, Jg. 52, Nr. 156, 3. 4. 1923 Abend-Ausg. 4 Europa, Reich über den Reichen. (Tl. I später: „Wirtschaft“. 1923; Tl. II später: Anfänge Europas) In: Die Neue Rundschau. Berlin. Jg. 34 der Freien Bühne. Bd. 2, H. 7, Juli 1923, S. 577-602. 44-46 „Diktatur der Vernunft“ 244-246など。AW, Bd. 12, S. 98-102, S. 102-118, S. 119-126.

- (8) Mann, H.: Kobes. Mit 10 Litogr. v. George Grosz. Berlin, 1925. 本書には邦訳があるので、くわしい紹介は省略する。筑摩書房版世界文学全集45 H・マン所収。
- (9) Dito: AW, Bd. 12, S. 289.
- (10) Banuls, A.: Heinrich Mann. Stuttgart, Berlin, Köln, Mainz, 1970, S. 165.
- (11) Mann, H.: AW, Bd. 12, S. 60.
- (12) Berle がハインリヒ・マンのエッセイに一九二五年を境に現れた変化を指摘している。本書は他の部分では従来の説を踏襲するだけで終わっているが、この指摘は類書に見られないものでもあろう。Berle, W.: Heinrich Mann und die Weimarer Republik. Bonn, 1983, S. 187 ff.
- (13) Winter, L.: Heinrich Mann und das Publikum. Köln und Opladen, 1965, S. 61.
- (14) Mann, H.: AW, Bd. 12 S. 52.
- (15) 「ハインリヒ・マンの歴史小説『アンリ四世』について」ドイツ文学研究・報告第二十七号、(京都大学教養部ドイツ語研究室)、『一九八一、一四三ページ、とくに三二ページ以下。
- (16) トルレーベンが暗殺され、マンゴルフが後を継ぐ部分は、モデルと歴史的事実が食い違っている唯一の箇所である。実際はベートマン＝ホルヴェークは、マンゴルフが死ぬ一九一七年まで宰相をつとめたのである。作者はなんらかの事情でどうしても暗殺の事実を挿入したかったようである。
- (17) Emrich, E.: Macht und Geist im Werk Heinrich Manns. S. 362 ff.